75 期リレーエッセイ

後悔，そして再出発

会員　渥美 木理

この度，本誌の75期リレーエッセイの原稿を書かせていただくことになった。今でこそ弁護士としてエッセイを書いているが，自分が弁護士になるなんて，数年前まで考えもしなかった。

まず，私は中学の頃から，柄にも似合わず，歌手になって音楽業界に入ると意気込み，養成所等に通っていた。高校の時は，音楽を目指す人の養成所が併設された通信制高校に通った。結局箸にも棒にもかからなかったが，せめて音楽業界の裏方になろうとして専門の大学に通い，音楽編集や録音技術を専攻した。最初の一年目は休学してアルバイトをしながら音楽活動を続ける程で，まれに見る執着心であった。

しかし結局自分の望み通りに事は運ばなかった。そもそも自分はシャイであるし，音楽業界は自分に全く向いていなかったと徐々に気づいていった。人生の選択を誤ったと感じ，自分の殻にこもるようになった。大学は一応通って卒業したものの，卒業後は家業を手伝うだけで，家にこもる生活になった。

そんな中，30歳近くになった頃，急激に，自分が社会から孤立しているという不安を感じた。長い年月，自分が音楽業界に入ることばかりを考え，他者との協調性を養うことを怠っており，社会の一員としての自信を失っていた。その不安を消すため，まず家庭教師のアルバイトを始めて人との繋がりを作った。続いて，集団社会に入って，人との関わりに自信を持ちたいと感じるようになった。そこで，もう一度大学に通って社会に戻る勇気を見出したいと思った。親に内緒で願書を出し，勢いに任せて大学を受験した。大学に再び通うことについて親との確執が続いたが，最終的に卒業させてくれた親には感謝してもしきれない。

大学では，興味があったグローバル教養学部に入った。学生同士の関係が近い，英語系の学部だ。サークルにも入った。最初は久しぶりの他者とのコミュニケーションに戸惑ったが，大学に通ったことで，自分がそれまでおろそかにしていた他者との関係性について，改めて考えさせられた。

大学２年の終わりに，将来どうすべきか考えた末，司法試験受験を決めた。子供のころ勉強が得意だったのに勉強してこなかった後悔と，これまで社会に貢献せずに時間を無駄にしてきた後悔，また，早く一人前に働いて親を安心させたいという思いから，真っ当に努力してみようと思ったのだ。努力が報われ，大学を卒業した年に予備試験に合格，その翌年に司法試験に合格した。

晴れて弁護士になり，現在は新人弁護士として働いている。弁護士になって感じることは，弁護士の仕事は，法律論を練って依頼者の要望を叶えるだけではなく，依頼者とのコミュニケーションを通して，依頼者のために何が必要なのかを引き出す仕事でもあるということだ。依頼者は，現状について相談しに来るが，明確に整理できていない場合もある。依頼者が初めての法律相談で「こうして欲しい」と述べたとしても，それが依頼者にとってどのような結果になりうるのかを考え，他の対応についても検討，相談し合いながら，依頼者の希望の最終確認をすることが大切だと感じる。相談し合う中で，それが法律構成としても可能であるかを考えつつ方向性を決めていく，とても深い仕事であると感じる。依頼者のために最善を尽くせるよう，努力したい。

思い通りに行かず悩むことも多いが，経験豊かな先輩たちを見習っていきたい。